

## 心臓血管外科

平成 28 年度の心臓血管外科手術総数は 139 件であり、手術死亡は 3 例であった。内訳は、体外循環未使用手術（主に動脈管開存、シャント、肺動脈絞扼など姑息術）31 例、体外循環使用手術は 108 例であった。心大血管手術は 125 件であり、その他（肺生検、ペースメーカー）14 件であった。年齢分布は、新生児 15 例（11%）を含む乳児症例 69 例（49.6%）が半数を占めた。

旧病院 9 ヶ月、新病院 3 ヶ月の今年度も貴重な症例を多数経験できた。京都府立医科大学から山岸正明教授を招き TGA 3 型に対する Half turn 手術を執刀して頂いた。単冠動脈に対する half turn 手術は世界に報告例がなく非常に貴重な経験となった。Norwood 手術から Fontan 手術までを 2 代目科長中村譲先生が執刀完成させた左心低形成症候群 18 歳男性に対する肺動脈弁置換術を経験した。東京慈恵会医科大学柏病院から長沼宏邦部長を招き、成人大動脈弓手術に多用する脳分離体外循環を併用しての弁置換手術を経験した。これは後の Norwood 術後大動脈弁狭窄症 1 歳児に対する Yasui 手術に活かされ、大動脈を遮断することなく心内修復を行うことができた。

また 2013 年に発生した MRSA 渦も、再開から移転までの 3 年間 400 余例中 1 例のみに阻止することができ、感染対策に関わった全ての関係各位に深謝する次第である。

2017 年 1 月から新病院がスタートし、PICU 体制、手術室体制が新しくなり周産期医療が始まった。重症例が増える中、成績を安定させるべく安全確実な手術を目指していく。

(野村耕司)

## スタッフ

野村耕司（部長兼科長 日本胸部外科学会指導医、日本心臓血管外科専門医、日本外科学会専門医、日本外科学会指導医）

黄 義浩（副部長 日本心臓血管外科専門医、日本外科学会専門医、日本外科学会指導医）

中尾 充貴（医員 日本外科学会専門医）

木南 寛造（医員 日本外科学会専門医）

表1 体外循環使用例

	28日未満	～1歳未満	1歳以上	計	備 考
完全大血管転位症	2	2	2	6	ASO:3(Half-turn:1 Jatene:1 Sinus pouch:1) FTB ICR:1 ほか
大動脈弓離断複合			3	3	Yasui:1 SVAS解除:2
肺動脈閉鎖症		1	2	3	TCPC:1 UF:1
総肺静脈還流異常症	1(1)	1	2	4(1)	Infra TAPVC+MAPCAs:1(1) ASDclose+PM
心房中隔欠損症			15	15	
肺静脈還流異常症合併					
不完全型房室中隔欠損症					
完全型房室中隔欠損症		3	1	4	One patch:1 Two patch:2 ほか
心室中隔欠損症		18	10	28	
肺動脈狭窄症合併		3	2	5	
ファロー四徴症	1(1)	1	10	12(1)	On-pump BT:1(1) Closing VSD:1 re-RVOTR:3 ほか
両大血管右室起始症		1		3	BCPS:1 TCPC:1ほか
BWG症候群		1		1	
単心室		3	7(1)	10(1)	HLHS s/p PVR: 1(1) TCPC:2 ほか
Ebstein奇形		2		2	TV plasty:1 ほか
修正大血管転位症	1	1	1	3	TVR:1 UF:1 Center PA plasty+BT:1
右室二腔症					
その他	1	2	6	9	三心房心:1 On-pump COA:2 Coronary-RV fistel:1 Isolated PVO:1
計	6(2)	39	63(1)	108(3)	

( )手術死亡数

表2 体外循環未使用例

列1	28日未満	～1歳未満	1歳以上	計	備 考
動脈管開存症	6	7		13	1000g未満 4
大動脈縮窄/離断	3		2	5	
肺動脈閉鎖	2	8	1	11	B T8 肺生検 1
心房中隔欠損症					
心室中隔欠損症					
ファロー四徴症			1	1	BT 1
三尖弁閉鎖症	1		1	2	PAB 1 肺生検 1
房室中隔欠損症		2		2	
両大血管右室起始症	1		1	2	肺生検1
左心低形成症候群			1	1	肺生検1
ペースメーカー		1	2	3	TGAASO術後1
その他		1		1	
計	13	19	9	41	

( )手術死亡数

## 脳神経外科

平成 28 年度の脳神経外科診療は常勤医 2 名（脳神経外科学会専門医）、レジデント 1 名の 3 名で開始し、平成 29 年 1 月から常勤医 1 名が加わり 4 名で行った。各レジデントの任期は 3 カ月である。

外来部門は年間延べ患者総数 4019 名、新患総数 210 名、再来患者総数 3809 名で、例年より減少した。新患患者数が増加していることから、年長児の逆紹介推進による再来患者数の減少を反映した結果と考える。

入院部門は入院延べ患者総数が 153 名で昨年度より減少した。疾患別では中枢神経系奇形 61%、脳脊髄腫瘍 13%、頭部外傷 4%、脳血管疾患 10%で、前年と比較して脳脊髄腫瘍の比率が増加した。年齢別では新生児・乳児 27%、1-2 才 18%、3-6 才 25%、7 才以上 30%で新生児・乳児の比率が増加し、学童期以降の比率が減少した。平成 28 年度は脳脊髄腫瘍の増加と新生児・乳児患者の増加が特徴であった。

手術総数は 94 件と減少した。手術術式別では脳室腹腔吻合術 12 件、脳腫瘍摘出術 14 件、脊髄脂肪腫摘出術 9 件、頭蓋顔面形成術 12 件と脳腫瘍の手術が増加し、神経内視鏡手術等の低侵襲手術が今年度も増加した。平成 29 年度からはニューロナビゲーションシステムが本格的に稼働するため、更なる手術の低侵襲化を目指すとともに最先端の診療を行っていきたいと考えている。

本年度は病院移転の関係もあり入院外来患者数、手術件数ともに減少したが、新生児・乳児患者の比率が増加したこと、脳腫瘍手術件数が増加したことから、小児病院脳神経外科としての役割は十分に果たせた 1 年であったと考える。

(栗原 淳)

## スタッフ

栗原 淳 (科長兼部長 脳神経外科学会専門医)  
影山 悠 (医員 脳神経外科学会専門医)  
山室 俊 (医員 脳神経外科学会専門医)

表一 入院患者疾患別・年齢別内訳（平成28年度）

疾患	新生児	乳児	1-2才	3-6才	7才-	計
1. 中枢神経系奇形						
先天性水頭症		2		6	7	15
全前脳胞症						
Dandy-Walker奇形						
脊椎破裂		2		3		5
脊椎破裂＋水頭症						
頭蓋破裂	1	2	1	1	1	6
頭蓋破裂＋水頭症						
脊髄脂肪腫	1	10	7	4	1	23
先天性皮膚洞・皮様嚢腫				1		1
Thight Filum Terminale			1			1
脊髄空洞症			4		6	10
くも膜嚢腫・頭蓋内嚢胞性疾患		2	3	4	2	11
先天性頭皮・頭蓋骨欠損		2		1		3
狭頭症・頭蓋顔面奇形		7	6	5	3	21
2. 脳脊髄腫瘍						
大脳半球腫瘍					2	2
脳室内腫瘍						
脳幹部腫瘍				1	2	3
鞍上部・視神経腫瘍	1				1	2
小脳・第4脳室腫瘍				3		3
松果体部腫瘍		1	1	1	1	4
眼窩内腫瘍					1	1
頭蓋骨腫瘍		2	2		1	5
脊髄腫瘍		1				1
3. 頭部外傷						
慢性硬膜下血腫		1				1
急性硬膜下血腫		1				1
急性硬膜外血腫						
硬膜下血腫(分娩時)						
脳挫傷・脳内血腫						
びまん性白質損傷						
頭蓋骨骨折		2	1	1	1	5
頭血腫・帽状腱膜下血腫						
脳震盪・頭部外傷後症候群						
外傷性水頭症						
外傷性脳血管疾患						
4. 脳血管疾患						
脳室内出血後水頭症		3		1	3	7
脳梗塞						
もやもや病				2	6	8
脳動静脈奇形					2	2
脳動脈瘤						
出血性素因による頭蓋内出血						
5. 炎症性疾患						
髄膜炎後水頭症					2	2
頭蓋骨骨髓炎						
脳膿瘍					1	1
硬膜下膿瘍						
脳・髄膜炎・脳炎						
6. その他						
計	3	39	28	38	45	153

表二 手術数（平成28年度）

脳室－腹腔吻合術	16
脳室－心耳吻合術	0
硬膜下腔－腹腔吻合術	0(1)
嚢腫－腹腔吻合術	0
空洞－くも膜下腔吻合術	0
脳腫瘍摘出術	8
眼窩内腫瘍摘出術	1
脊髄腫瘍摘出術	1
頭皮・頭蓋骨腫瘍摘出術	6(8)
くも膜嚢腫開放術	1
頭蓋内血腫摘出・除去術	
硬膜下血腫	1
硬膜外血腫	1
脳内血腫	1
脳動静脈奇形摘出術	1
脳動脈瘤根治術	0
EDAS/EMS	3
脊椎破裂根治術	2
脊髄脂肪腫摘出術	22
先天性皮膚洞摘出術	4
頭蓋破裂根治術	2
頭蓋形成術	9
頭蓋顔面形成術	10
上位頸椎・後頭蓋窩減圧術	4(6)
開頭・排膿ドレナージ術	0
脳室リザーバー・マッカムチューブ装着術	1
穿頭・脳室ドレナージ術、硬膜下ドレナージ術	3(6)
穿頭・頭蓋内圧センサー装着術	2(8)
神経内視鏡手術	11
選択的脊髄後根切断術	7
血管内手術	0
計	117

( )内、同時手術における延べ手術数

## 整形外科・リハビリテーション科

平成 28 年度の外来新患数は 630 人で、平年並みであった。疾患別では股関節疾患が最多で、次いで先天性疾患が多くみられた。手術件数は 258 例で新病院移転の影響で前年度より減少した。疾患は四肢先天異常（多指症 など）（53 件）、内反足に対する手術（35 件）が多く、緊急手術は化膿性関節炎による切開排膿術であった。平成 22 年度に開始した脳性麻痺患児の痙性尖足、斜頸、に対するボツリヌス注射も月 2 回に施注機会を増加させ対応している。それに伴って脳性麻痺患児に対する筋解離手術も増加した。

## 形成外科

昨年末の病院移転に伴い、外来・手術ともに診療制限があったにもかかわらず、新患者数・手術件数ともに増加していた。旧病院での手術を希望されていた患者達に駆け込み的に手術を行った事と、新病院より手術日・外来日とともに増やした事も一因と思われる。また、救急診療科・集中治療科が新設されたことにより、外傷患者が急増している。旧病院から少しずつ、熱傷患者の受け入れを開始していたので、処置の手順や物品に関して、大きな混乱もなく対処できていたように思われる。新病院開院後に外来通院患者、入院患者の引き継ぎ等に関する運用面で、各部門との微調整を要したが、現在では一通りの流れが確立した印象である。形成外科のスタッフは、10月から赴任した宇都宮医師が、1月に形成外科専門医を取得した。そのため、外来・手術ともに充実した布陣で対応することが可能であった。しかしながら、部長兼科長を務めておられた渡邊彰二医師が、4月に副病院長に就任されたことにより、臨床面に携わる機会が減ってしまわれ、戦力ダウンとなってしまった。増加し続けるニーズに対応する為には、地域医療との協力体制を構築して、マンパワー不足を補うことが喫緊の課題である。

(渡辺あずさ)

## スタッフ

渡邊彰二（副院長 日本形成外科学会専門医 皮膚腫瘍外科指導医）

渡辺あずさ（科長 日本形成外科学会専門医）

加藤基（医員 日本形成外科学会専門医）

宇都宮裕己（専攻医 日本形成外科学会専門医 H28年10月～H29年6月）

横山貴之（専攻医 平成29年4月～）

渡辺太朗（専攻医 平成29年7月～）

藤澤興（専攻医 平成28年4月～H29年3月）

表1. 新患内訳

疾患名	平成27年度	平成28年度
新患総数	685	738
頭蓋顎顔面の異常	12	8
眼(眼瞼下垂・内反等)	4	16
耳の異常	87	105
鼻の異常	0	3
口唇口蓋裂	71	70
口唇裂以外の口の奇形	6	2
手足・爪の奇形	49	68
体幹の異常	5	15
良性皮膚腫瘍・軟部腫瘍	72	99
悪性皮膚腫瘍	0	0
いちご状血管腫	94	76
単純性血管腫	50	45
先天性血管腫	27	17
VM	7	4
AVM	0	0
LM	16	12
色素性母斑	37	37
扁平母斑	22	18
太田母斑	3	2
異所性蒙古斑	35	27
脂腺母斑・表皮母斑	22	29
外傷	18	37
熱傷	16	17
瘢痕拘縮	14	17
褥瘡・難治性潰瘍	3	1
その他	40	13

表2. 手術件数（各年1月から12月統計）

	2014	2015	2016
口唇口蓋裂	107	77	102
頭蓋顎顔面の先天異常	62	72	84
四肢の先天異常	28	41	51
体幹(その他)の先天異常	1	3	9
良性腫瘍	139	135	148
悪性腫瘍	0	0	0
癒痕拘縮・ケロイド	3	1	8
外傷	5	11	10
難治性潰瘍	3	1	1
レーザー	195	240	258
その他	9	7	2
全身麻酔手術(小計)	344	383	436
局所麻酔手術(小計)	208	204	239
手術件数(合計)	552	593	675



## 泌尿器科

手術：全手術件数 369 件で昨年度に比べ、85 件増加となったが現在までのピーク時の 20%減である。これは病院移転による影響と考えられた。このうち腹腔鏡下手術が 30 件 (8.1%) で尿路内視鏡下手術が 31 件 < 8.4% > を占めた。1. 早期離床、2. 入院期間短縮、3 整容性の向上を目的として、これら腹腔鏡下手術と尿路内視鏡手術を中心にDJ尿管ステント法や二重オムツ法などを多用して、低侵襲手術の拡大、増大、開拓をさらに進めていくつもりである。また腹腔鏡や尿路内視鏡の器具の進歩、ステント類の縮小化などにより、先天性の小児手術においても腹腔鏡と尿路内視鏡を併用したある意味でのHybrid手術が、今後さらに発展するものとする。症例を重ねて有用性、安全性を報告していきたい。

尿路内視鏡手術のメインである膀胱尿管逆流へのヒアルロン酸注入術は保険収載後、約 7 年で 200 症例 280 尿管数を超え、治療成績も良好であり、数多くの御紹介を頂いている。

腹腔鏡下手術で最多の非触知精巣（腹腔内精巣）手術も 300 症例を超えて 100 精巣以上の腹腔内精巣の治療も行った。精索静脈瘤と性分化疾患精査治療はいずれも腹腔鏡下手術を原則施行しており、各方面から評価を頂いている。

水腎症に対する腎盂形成術は乳児期では小切開開腹手術、幼児以降では腹腔鏡下手術を施行している。これは患児の負担を最小限とし、各術式の長所を最大限に利用するためである。

手術における目標到達点は①治療の確実性があること、②低侵襲性であること、③手術麻酔の反復性が少ないこと、④レントゲン被爆量が極力ないこと、⑤保険適応があることと考えている。

病棟：手術以外の入院理由は i 尿路奇形精査、ii 神経因性膀胱児の間欠導尿もしくは間歇自己導尿手技獲得目的およびiii性分化疾患へのホルモン負荷試験目的などであった。

外来；延べ患者数は 5668 名でそのうち新患者数は 453 名と両方とも減少した。

スタッフ：多田 実

大橋研介

植草省太

船越大吾

家崎朱梨

非常勤医（外来&UDSを中心に）

小林堅一郎

堀祐太郎

非常勤医（手術を中心に）

益子貴行

大橋研介

船越大吾

表 平成28年度手術件数の内訳

( ) 腹腔鏡下手術 < > 尿路内視鏡下手術

①腎臓

腎盂形成術	20 (4)
腎摘除術	1 (1)
腎部分切除	1 (1)
腎婁造設&交換	2

②尿管&膀胱

膀胱尿管逆流防止術	78 < 29 >
尿管瘤切開術	2 < 2 >
膀胱鏡検査	21 < 21 >

③尿道

尿道下裂初回形成術	37
尿道下裂婁孔閉鎖&修正	5
尿道狭窄拡張術	10 < 10 >
真性包茎手術	24

④性腺

精巣固定術	89 (14)
精巣摘除術	8 (6)
精索静脈瘤手術	4 (4)

その他

	67
全手術件数	369 件
腹腔鏡下手術	30 件
尿路内視鏡下手術	31 件

## 耳鼻咽喉科

平成 28 年度東大医局の人員不足のため、常勤は浅沼聡、安達のどかの 2 人体制となりました。引き続き、大学医局より吉川弥生先生が週 1 日外来を担当しました。

さいたま新都心に移転し、2017 年 1 月から新病院での外来診療が開始されました。外来診察室は、耳鼻咽喉科ユニット一式、耳処置等を行うための診察ベッド、顕微鏡、電子スコープを備えたフル装備の診察室を 3 室設けることができました。耳鼻咽喉科外来内に聴力検査室を 3 室設け、遊戯聴力検査から純音聴力検査までできる部屋が 2 室、純音聴力検査のみできる部屋が 1 室となっています。また、旧病院では耳鼻咽喉科外来から離れた場所にあった補聴器外来を耳鼻咽喉科外来内に設け、言語聴覚士と患者さんについての情報および意見交換がリアルタイムでできるようになりました。また耳鼻咽喉科外来内にファイバー洗浄室を設置し、3 台の洗浄器で電子スコープおよびファイバースコープの洗浄を行っています。ハード面では小児耳鼻咽喉科領域ではベストの耳鼻咽喉科外来を構築することができました。

当科はこれまで通り、小児耳鼻咽喉科疾患全般にわたり診療していますが、とくに小児難聴の早期発見・療育、いびきと睡眠時無呼吸の診断・治療、在宅気管切開管理の 3 本柱があります。一般外来のほかに 7 つの専門外来があり、新生児聴覚スクリーニングで発見された 1 歳までの乳児を対象とした難聴ベビー外来(含音楽療法)、加我外来、人工内耳外来(山嵜教授)、補聴器外来、在宅気管切開管理などの気管切開外来、気管・喉頭外来(東大二藤講師)、サイトメガロウイルス(CMV)外来(東大小児科岡岡教授)などがあります。

新生児聴覚スクリーニングで要再検となった児の精密聴力検査実施機関に指定されており、生後 6 日からの新生児・乳児が多数紹介されています。生理検査室の協力を得て、産院から紹介初診となった当日に ABR を実施し、結果の説明をしています。予約をして後日 ABR を実施する施設がほとんどである中、即日の ABR 実施は当院の特徴の一つでもあります。受診してから検査までの時間が長いと、その間ご両親とりわけ出産後まもないお母様が不安になることがわかっており、それに配慮して生理検査室の協力を得て即日実施をしています。検査結果で両側 50dB 以上の感音難聴と判明した場合には、難聴ベビー外来で対応をしています。早期の難聴原因検索、聴覚管理、補聴器の調整、その後の療育への一連の流れ、両親への精神的サポートを、小児科医、言語聴覚士、看護師、社会福祉士、音楽療法士などの助けを得てチーム医療として行っております。難聴ベビー外来は月一回の 1 2 回コースですが、平均 20 ~ 25 人くらいの参加者がいます。

いびき・無呼吸で紹介となった児は、問診に続いて扁桃肥大・アデノイド増殖症、鼻閉などの所見の有無を精査し、全員にアプノモニターを実施、必要がある児にはポリソムノグラフィーを実施して客観的な評価を行い、手術適応を判断しています。紹介患者の増加とともに睡眠時無呼吸症候群に対する手術(アデノイド切除術・両側口蓋扁桃摘出術)件数も近年増加しています。近年は、リスク(3 歳以下、合併症、頭蓋顔面形態異常等)のある児についても、適応があれば関係各科と協力して手術適応としています。

(浅沼 聡)

## スタッフ

浅沼 聡 (科長兼部長)

安達のどか (医長、日本耳鼻咽喉科学会専門医)

表1 2016年度手術件数(333件、外来手術を含む)

①耳手術(200件)		③口腔・咽頭・喉頭・頸部(119件)	
鼓室形成術	11	両側口蓋扁桃摘出術	26
試験的鼓室開放術	2	両側口蓋扁桃摘出術&アデノイド切除	57
先天性耳瘻孔摘出術	8	アデノイド切除術	7
副耳切除術	5	舌小帯形成術	5
耳血腫圧迫固定術	1	喉頭微細手術	5
鼓膜チューブ留置術(全麻)	69	気管孔閉鎖術	3
鼓膜チューブ留置術(外来)	104	気管孔肉芽切除術	3
②鼻手術(14件)		咽後膿瘍切開排膿術	2
上顎洞後鼻孔ポリープ切除術	3	咽頭嚢胞摘出術	2
鼻ポリープ切除術	1	下口唇嚢胞摘出術	2
下鼻甲介切除術	6	術後出血止血術	1
鼻中隔矯正術	2	その他	6
後鼻孔閉鎖症手術	1		
鼻腔腫瘍切除術	1		

表2 平成27年度補聴器外来、聴力検査件数

	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
補聴器	新来	5	2	2	2	4	5	3	4	6	3	4	4	44
	再来	50	39	41	36	47	49	40	48	46	47	47	55	545
補聴器小計		55	41	43	38	51	54	43	52	52	50	51	59	589
聴力検査		267	190	230	248	285	262	195	229	187	165	194	248	2700

## 眼科

平成28年度は、前年度から医師1名が増員され常勤医師2名、レジデント1名での診療体制となった。

外来：外来新患数とその疾患内容を表1に示す。

内容について特筆すべき点は色覚検査の増加であり、平成27年度3例から平成28年度18例に急増した。その背景として平成26年の学校保健安全施行規則一部改正に伴う学校内での色覚検査の復活が挙げられる。平成14年に健康診断から色覚の項目が削除されて以来、学校では実施されてこなかった色覚検査であったが、平成27年度以降改めて検査されるようになったことを受け受診者が増加した。

入院および手術：入院患者数と疾患内訳を表2に示す。新病院移転前後は手術件数を制限したが、年間件数としては増加した。

未熟児網膜症の発生状況：レーザー治療を施行した未熟児網膜症は2例3眼であった。

(眼科 神部 友香)

## スタッフ

神部 友香 (医長 日本眼科学会専門医)

大野 瑞 平成28年4月～平成29年3月 (医員)

村上 恵美 平成28年4月～平成28年9月 (レジデント)

徳力 千智 平成29年10月～平成29年3月 (レジデント)

表1. 外来新患疾患別内訳 (平成28年度)

疾患名	症例数	疾患名	症例数
全身疾患による眼障害	148	ワニの涙症候群	1
斜視、弱視	227	眼球運動障害	1
屈折異常	52	眼窩血管腫	1
脳内疾患による眼障害	12	小眼球	2
眼瞼下垂	16	眼球癆	1
睫毛内反	36	結膜疾患	3
涙器疾患	31	眼瞼縮小症候群	3
眼振	13	デルモイド	3
未熟児網膜症	8	霰粒腫	8
心因性視力障害	12	麦粒腫	1
白内障	9	強膜メラノーシス	1
角膜疾患	5	太田母斑	1
前眼部形成異常	3	網膜芽細胞腫	5
網膜疾患	11	網膜腫瘍	2
視神経疾患	4	白皮症	2
緑内障	3	羞明	2
ぶどう膜炎	3	色覚異常の疑い	18
結膜炎	1	眼窩底骨折	1
瞳孔膜遺残	1	眼窩蜂窩織炎	1
		合計	697

表2. 入院患者の内訳 (平成28年度)

疾患名	症例数
外斜視	47
内斜視	14
その他の斜視	2
眼瞼内反症	36
先天鼻涙管閉塞	15
結膜腫瘍	4
デルモイド	1
虹彩癒着	1
霰粒腫	10
眼球摘出術	1
白内障	9
緑内障	6
網膜変性、増殖硝子体網膜症に対する網膜光凝固術	7
全麻下検査	1
眼窩蜂窩織炎	1
合計	155

## 皮膚科

現在常勤医師 2 人体制で週 5 日の診療を行っている。

外来では主にアトピー性皮膚炎を含めた湿疹皮膚炎群および血管腫・血管奇形や太田母斑・異所性蒙古斑などの疾患がおおくみられる。昨年に引き続きアトピー外来およびレーザー外来を設けて診療にあたった。

また、入院による全身麻酔下でのレーザー治療および手術も行っている。

さらに入院中の患児の様々なスキントラブルに対しての往診も積極的に行い、今後も継続していく方針である。

表 1 に昨年度の外来患者の疾患内訳を示す。

(玉城善史郎)

## スタッフ

玉城 善史郎 (医長)

中村 理沙絵 (医員)

表 1 外来患者疾患内訳

疾患群	患者数	疾患群	患者数
湿疹・皮膚炎群	1005	付属器疾患	222
蕁麻疹・痒疹・皮膚そう痒症	40	母斑と神経皮膚症候群	98
紅斑・紅皮症	30	血管腫・血管奇形	425
薬疹・GVHD	56	異所性蒙古斑・太田母斑・扁平母斑	228
血管炎・紫斑・脈管疾患	22	色素性母斑	129
膠原病及び類縁疾患	36	良性腫瘍	337
物理化学的皮膚障害・光線過敏	110	ウイルス感染症	150
水疱症・膿疱症	1	真菌感染症	47
角化症	53	細菌感染症	27
色素異常症	54	虫刺症など	4
真皮・皮下組織の疾患	20	その他	27
		合計	3154

## 小児歯科

平成28年度の歯科業務は、常勤の専任歯科医師である高橋康男（歯科科長、日本小児歯科学会専門医指導医、日本障害者歯科学会認定医）、日本大学歯学部小児歯科学講座より週2日派遣の黒木洋祐（非常勤歯科医師、日本障害者歯科学会認定医）および週1日派遣の伊藤寿典（非常勤歯科医師）が診療業務にあたった。外来診療日については、月曜日、火曜日、水曜日（第1・第3水曜日は午前のみ）および金曜日の午前・午後、第3木曜日を除く木曜日の午前、計週5日間行った。歯科衛生士は、木場和江、渋谷美保、佐藤康子、肥沼順子、岡田美佳の5名が歯科診療補助、外来受付業務を行った。歯科衛生士の木場はDK. 外来などの特殊外来による予防活動も行った。また、毎月第1木曜日午後、実施されているもぐもぐ外来（多職種プログラム外来）には専任歯科医師の高橋が診療に参加し、摂食に関連する歯科領域の指導を行った。

平成28年度の診療実日数は、計218（前年度226；以下のカッコ内は前年度の数とする）日で前年度より減少し、診療延べ患者数も計3,997（4,084）名と前年度より減少した。1日平均患者数は、18.3（18.1）名で前年度と比較し、増加した〔表1〕。年間初診患者数においては213（223）名で月平均17.8（18.5）名と前年度と比較し、減少した〔表2〕。院内初診患者は、各診療科からの紹介を原則とし、その内訳は外来167（172）名、入院46（51）名であり、初診患者は外来、入院とも減少した。紹介診療科別内訳は、遺伝科85（105）名と最も多く、ついで血液・腫瘍科31（31）名、以下、感染・免疫科13（10）名、形成外科11（11）名、総合診療科10（16）名、神経科9（9）名、未熟児・新生児科9（3）名、発達・もぐもぐ外来9（7）名、およびその他であった〔表3〕。

平成28年度の当科における主な業務内容は、従来通り齲蝕と歯周疾患の予防と処置が中心であった。また、口腔外科処置については、埼玉医科大学総合医療センター歯科口腔外科からの応援医により延べ28名行われた。さらに、矯正科医による顎顔面領域に問題のある患児に対しての歯列矯正は延べ33名だった。

そして、全身麻酔下での歯科処置は4件行った。

（高橋 康男）

## スタッフ

高橋康男（科長兼副部長、日本小児歯科学会専門医指導医、日本障害者歯科学会認定医）  
 黒木洋祐（非常勤歯科医師、日本障害者歯科学会認定医）  
 伊藤寿典（非常勤歯科医師）

表1 月別診療実日数・診療延べ患者数・1日平均患者数(平成28年度)

項目	年	平成28年										平成29年			合計
	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
診療実日数(日)		19	16	20	19	21	18	19	17	14	17	18	20	218	
診療延べ患者数(名)		340	324	347	356	398	328	347	330	256	277	327	367	3997	
1日平均患者数(数)		17.9	20.3	17.4	18.7	19.0	18.2	18.3	19.4	18.3	16.3	18.2	18.4	平均	
														18.3	

表2 月別初診患者数(平成28年度)

項目	年	平成28年										平成29年			合計
	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
診療延べ患者数(名)		19	17	20	20	20	11	9	19	8	26	22	22	213	
		年間平均：17.8名/月													

表3 初診患者の病棟別・疾患別内訳（平成28年度）

外来・入院別及び病棟内訳			紹介科別内訳			
			内科系		外科系	
●外来	合計	167名	血液・腫瘍科	31名	小児外科	3名
●入院〈旧病院〉			神経科	9名	心臓血管外科	2名
		〈新病院〉	精神科	3名	脳神経外科	4名
養護第一病棟	(1A)	8名	代謝・内分泌科	2名	整形外科	
養護第二病棟	(1B)	2名	腎臓科	2名	皮膚科	4名
養護第三病棟	(1C)		遺伝科	85名	耳鼻咽喉科	4名
循環器病棟	(2A)	3名	感染・免疫科	13名	形成外科	3名
外科第一病棟	(2B)	3名	アレルギー科		眼科	11名
外科第二病棟	(2C)	2名	循環器科	6名	泌尿器科	1名
幼児学童内科病棟	(3A)	14名	総合診療科	10名	麻酔科	2名
乳児内科病棟	(3C)	2名	未熟児・新生児科	9名	放射線科	1名
未熟児・新生児病棟	(3D)					
	合計	34名	合計	170名	合計	31名
			救急科	2名	発達, もぐもぐ外来	9名
			集中治療室	1名		
			合計	3名	合計	9名
初診患者数	合計	213名				